

1K08B065-7 木村圭佑

主査木村和彦先生 副査間野義之先生

【緒言】

近年、生涯スポーツの一環や地域コミュニティの形成、スポーツ実施率を高め健康的な社会を実現するために総合型地域スポーツクラブが注目されている。総合型クラブが各地で設立され増加する一方で、総合型クラブが既存団体の協力や理解が得られないままで地域にある限られた施設を使用できなかつたり、地域住民の理解も得ることができず、設立や運営がうまくいかない事例も見られる。特に既存のスポーツ少年団などは地域の学校施設を昔から既に使用して活動しているため、新規参入してくるクラブに対してなかなか理解を示さないこともある。総合型クラブが今後各地で運営されていくためには既存団体との連携や理解は必要不可欠であると筆者は考える。

【目的】

本研究を通して、新町スポーツクラブが設立の経緯の中で既存の種目がクラブが設立され、所属したことで変化したことを明らかにし、そこからなぜクラブに所属した少年団の団員が増え、クラブに所属しなかった少年団の団員は減少してしまったのかということを明らかにする。それによって今後各地域に設立、運営される少年団を核としたクラブが少年団とどのように連携していくことが理想なのかということを考える上での参考になることを目的とする。

【方法】

調査方法は、11月15日、11月20日の2日間にクラブへ行き調査を行った。対象は新町スポーツクラブのクラブマネージャーである小出さんとクラブ設立当時よく知る2名の方及び新町剣道クラブ代表の方、和太鼓しのぶ会代表の方、パワーオリオンズの代表の方、新町 SVC スポーツ少年団の保護者とした。調査方法はクラブマネージャーの方以外は質問紙調査を行い、電子メールによる回答をお願いした。クラブマネージャーの小出さんはインタビューを行う時間を作っていただいたため、調査的面接法を用いて調査を行った。

【結果・考察】

新町スポーツクラブの設立によってクラブが変化したことに対する調査では、団員増加に繋がるような大きな変

化は見られなかった。しかしクラブ設立と直接的な因果関係はないものの、既存団体部門では SVC がクラブ設立と同時期にドッジボールと国内国際交流事業を開始、直轄運営部門では指導者が定まらなかったため指導者の交代が何度かあり、結果的にサッカーやバスケットボール教室では指導者の質が高くなるといった変化は起こっていた。新町 SVC の保護者に対して行った調査では入団した理由の多くが「運動が苦手な子供の運動不足解消」、「ドッジボールがしたかった」、「スポーツ以外のイベントが楽しめる」などといった回答であった。この結果から 1.クラブに所属していない種目に比べてリーダー養成や海外との交流などスポーツ以外の活動が魅力的だった。2.運動が出来ない子供でも楽しめるようなプログラムが組まれているという点が魅力的であった。3.ドッジボールという子供に人気の高いスポーツを始めた。4.直轄運営部門であるサッカー、バスケ教室の指導者の質が高い。という4点がクラブに所属した種目と所属しなかった種目で団員の増減に差が生じた原因だと考える。また、新町スポーツクラブは設立後、長い期間をかけ地域行事への参加などという活動を行い、地域住民や学校との信頼関係を築いてきた。筆者が実際にクラブに調査を行った際にクラブや地域の住民の方にお話を伺い、お互いの信頼関係の厚さを感じた。この信頼関係もクラブに所属した種目の団員増加に大きく影響を与えたのではないかと推測する。

【まとめ】

現状では少年団側が総合型クラブに対して理解を示さないケースが多く存在している。それは特に試合さえできればいい、競技会での勝利を目的とする競技志向の少年団が多いからだと考えられる。しかし依然として子供の運動能力や運動機会の低下が問題視されている今、競技志向だけでなく運動できない子供のためのプログラムを提供する必要もあると考える。そしてそれを担うのが総合型クラブではないだろうか。これから設立を迎えるクラブに対しては既存団体との理解や地域住民からの信頼を得られるような活動をしてほしいと考える。また、運動できない子供のためのプログラムを提供するようなクラブが今後各地に設立されることを期待する。